小泉信三賞選評

自己の模索

小川原正道（おがわらまさみち）
（慶應義塾大学法学部教授）

今回のコンテストの最終審査対象作品のうち、「文学は社会の役に立つか」をテーマに選んだ作品が最多を占め、小泉信三賞の稲垣論文もその一編である。若者の活字離れが叫ばれるなか、自らの読書体験を織り交ぜながら文学の「有用性」と格闘した力作が多かったことに、驚きと希望を感じた。

まずは稲垣論文を取り上げておこう。文学は社会の役に立つか、を問う際の即効性や実用性を偏重する姿勢こそ問題であるとする著者は、言葉の持つ力を「言霊」やキング牧師の名言などから引き出し、人間の言語の特徴として抽象的概念を持つことを挙げる。人間はそれによって世界を理解し、説明しようとしてきたとして、文学の価値を説く。引用、論理構成とも的確であり、小泉信三賞にふさわしい論文として評価された。

次席の鷲山論文は、『東京家族』『男はつらいよ』『万引き家族』という映画から、家族が変化し、日本人が大きな「忘れ物」をしてきたのではないかと問う。その回答として、『大家さんと僕』を参照しながら、家族の原像である「心の拠り所」「伝えること」を見いだし、生きている人の息遣いや思いを共有する、「創造する家族」の可能性を提唱する。映画などから巧みにエッセンスを読み取り、自らの論理を構築させている好論文である。

以下、佳作三編について。佐藤論文も家族に関する論文だが、アプローチが深い実体験に基づいている。祖父を喪った著者は、祖父が延命治療を望んでいなかったという事実をきっかけに、延命治療問題に取り組む。果たして延命治療は誰のためなのか、家族の自己満足のためではないか、患者本人の幸せが一番大事ではないか、と著者は訴える。

早坂論文は、福澤諭吉の『学問のすゝめ』を「実用的な観点」から取り上げ、現代日本においても実学の書として役割を果たしうるかを考察した。その考察のなかで、著者は福澤が公共や日本に対する貢献を強調していることに驚き、公共の精神と独立の精神とは両立、さらに相乗効果を生んでいると説き、成熟社会において自分本位の思考から離れる必要を感じて、平成最後の高校生にとっても同書は役立つという結論に達した。

一方、宮下論文は、進路選択時に文系・理系に分けることの長所・短所を分析した上で、文系・理系という視野の狭さにより、社会に属する一市民としての役割を果たせないことになるのではないかと問う。文系の人がニセ科学商品にだまされたり、理系の人が世界史を踏まえない発言を海外でしてしまう、といった問題であり、著者は、文系・理系の垣根を越えた幅広い視野をもつ市民の必要性を主張する。

文学を読む自分、家族の一員としての自分、高校生としての自分、市民としての自分……。自分自身のあり方を問い直しながら、今回の応募作品は書かれたといっていいだろう。その意味で、応募者各位にとって、受賞の是非も重要だが、執筆というプロセス自体が人生の糧となってくれたらと思う。

小泉信三賞選評

優れた文学論

荻野安奈（おぎのあんな）
（慶應義塾大学大学院文学研究科教授）

今回は文学に関わる課題が二つあり、文学部の教員として、読んで足元をすくわれるのか、それとも励まされるのか、緊張しながら読み進めた。

むしろ文学無用論があっても面白い、という発想自体が文系なのかもしれないが、実際にはバランスのとれた作品がほとんどで、粒ぞろいの豊年だった。

受賞作はタイトルに痺れた。「文学は社会の役に立つか」という設問自体の是非を「問う」。それだけで文学好きと察せられるし、批評精神の持ち主と分かる。

内容はタイトルを裏切らなかった。文学に有用性を求める社会は、「即戦力」以外の、いわば無用な存在を、許容しないことが冒頭で確認される。結論としては、「置き換え可能な歯車」に自足しない限り、人間は自己の本質を問い続ける文学的営為において「尊厳」を保つことが出来る。

冒頭と結論が見事に繋がって、全体がひとつの輪を描いている。輪の中身は多彩で、人間の思考と言語の関連性がまず確認される。次に、言葉による世界解釈の一方に自然哲学が、他方に神話が設定される。それが合理性に基づく科学と、不条理に対峙する文学に進化する。

文学の源泉に神話を置いたことで、論が膨らみ、また深まった。援用されるテクストも『ギルガメシュ叙事詩』から吉本隆明まで多岐にわたっている。世界と自分の関係性を問うために文学と関わってきた稲垣さんの、読書歴は長いと見た。

次席の鷲山さんは素直に楽しんで読めた。映画を通して家族を考えるという手法に独自性がある。『東京物語』、寅さん、そして『万引き家族』というセレクションがすでに雄弁で、人間同士の関係性が希薄な現代に、いかにして「互いに寄り添う」かが問われている。映画の次に来るのは漫画で、『大家さんと僕』における疑似家族の在り方が、ひとつの可能性として提示されている。近寄り過ぎず、離れ過ぎない絶妙な距離感。過去を未来につなげるための場が、そこにはある。最後に登場するのは鷲山さんの本物の家族で、事あるごとに「家族会議」を開く仲の良さが微笑ましい。

同じ家族を論じて、佐藤さんは延命治療という重い主題に立ち向かった。祖父の死を契機とし、延命治療の実際を日本のみならず欧米の例を含めて丁寧に論じている。佐藤さんは看護職を希望。是非このような人に看てもらいたいものだ。

早坂さんは「自分のために懸命に努力するよう促されてきた」高校生活の中で、『学問のすゝめ』と出会い、社会への貢献という新たな視点を獲得する。福澤諭吉が早坂さんにとって「新鮮」だったことが、私には新鮮だった。

宮下さんは理系偏重の現状を分析した上で、文系と理系の上位概念として「市民」を設定したことに独自性がある。今日、良き市民であるためには、専門知識のみでは事足りない。科学的知識の欠落は似非科学の跋扈を許す。歴史の無知は現状への正しい対応を妨げる。「総合的な視野を持った『ジェネラリスト』」でありたい、と私も思う。

小泉信三賞選評

期待したい若い人達の感性

権丈善一（けんじょうよしかず）
（慶應義塾大学商学部教授）

五つのテーマのうち、小泉信三賞は「文学は社会の役に立つか」、次席は「家族」、そして、三つの佳作は「家族」、「理系、文系」、「今の時代に『学問のすゝめ』を読む」からであった。

佳作から講評していこう。

テーマ「家族」を選んだ佐藤蘭美さんは、「家族と延命治療について」と題する論文をまとめている。祖父の死に動揺した筆者が、祖父が延命治療や蘇生処置はしないでほしいという希望を家族や病院に伝えていたと知り、延命治療、終末期医療について考えはじめる。他国の例も参考にしながら真摯に考察を進め、終末期医療に関して「家族のあり方が一層大切になるはずだ」という論に到達する。

宮下凜さんは、「現代日本における『市民』のあり方」を考えるきっかけとして、テーマ「理系、文系」を活かしている。文・理に分けることでより深く専門分野を学べるメリットがある一方、市民としては専門に特化しないジェネラリストが必要であり、総合的な視野を持って意欲的に学習することを怠ってはならないと説く。

早坂章さんは、「平成最後の高校生にとって『学問のすゝめ』は有用か」を考えている。「福澤が主張する様々な事柄には、その前提として公共に対する貢献、または日本という国に対する献身的な精神、愛国心が強力に働いている」ことを「新鮮」であるとし、自分は学校で目標や将来の夢を定めるよう言われるが、「世の中に貢献できるように勉強せよとか、公のために何か行動を促されることはほとんどない」。だが、「もう少し私たちの目が公共の貢献へと向けられなければ、福澤のような気概はなかなか起こらないのではないか。これはいわば、現代における「自己実現」の在り方の問題ではないか」と展開されていく文章を読み進めていると、平成最後の今の時代に、高校生に福澤の本を読んでもらうテーマを準備しておいてよかったと素直に思う。

次席に選ばれた鷲山拓見さんは、「『家族』を拓く」と題した論文を書いている。『東京物語』から『万引き家族』までの映画を題材として、時代とともに、悪しき方向、家族の劣化が進んでいるとみる。そして家族の原像を「心の拠り所」「伝えること」として、家族を創るために、血縁の家族だけではなく他者との関係につながる家族の在り方を考察していく。

小泉信三賞の稲垣早佑梨さんは、「『文学は社会の役に立つか』と問う社会を問う」――こうしたテーマが出されてきた時代背景を批判的に考察している。相模原の障害者施設で起きた殺傷事件などを筆頭に連想し、ああいう事件が起こる根底にある、「役に立つ」かどうかを強い価値基準にもつ現代の風潮を浮き上がらせ、筆者自身が読書家ゆえに展開できる縦横な論理で、そうした風潮を痛烈に批判していく。このテーマについては、他の高校生にも、「役に立つか」という問に反発する論文がいくつかあった。

様々な面で余裕を失い、役に立つかどうかで良し悪しを見る傾きを強めその方向に多くの仕組みを変えようとするこの国の大人達は、若い人達のこうした声に耳を傾ける余裕を持つべきなのだろう。

小泉信三賞選評

審査を終えて

須田伸一（すだしんいち）
（慶應義塾大学経済学部教授）

今回も多数の応募論文が集まったことに対し、審査員の一人として感謝申しあげる。最終審査進出者の論文では、課題4と5を扱ったものが少なく、各一編ずつという結果となった。課題4（「お金」の近未来）に関していえば、応募数は多かったが、目を引く論文に乏しかった。高校生にとって、この課題は難易度が高かったといえよう。一方、課題5（今の時代に『学問のすゝめ』を読む）では応募数自体が少なかった。『学問のすゝめ』を「読まず嫌い」な高校生が多いようなら寂しく思う。

さて、小泉信三賞に選ばれたのは稲垣早佑梨さんの作品で、即効性や実用性を偏重する今の社会の価値観を問い直すことを目的に、文学の価値を論じている。文学を人間の本質に直結したものと捉え、科学とは異なる意味で文学の「有用性」を示した点が評価された。ただし、導入部分には改善の余地があるだろう。「はじめに」で、テーマの選定理由だけでなく論文の全体像も示したなら、読みやすさが向上したに違いない。

次席の鷲山拓見君の作品では、三本の映画を通して戦前から現在までの日本の家族のあり方を考える視点を新鮮に感じた。マイナス点は、何かを論証しようとする意識が希薄なこと。論文は感想文ではないので、より緻密な論理構成が望まれる。タイトルの意味もよく理解できなかった。

佳作作品の中では、『学問のすゝめ』が現代の高校生に対してもつ意味を考察した早坂章君の作品を個人的に一番高く評価した。福澤の著作内容をよく消化したうえで書かれており、「公共への貢献」という視点から『学問のすゝめ』の今日的意義を捉えるロジックは、すんなりと理解できた。

つぎに佐藤蘭美さんの作品は、延命治療という重いテーマに挑戦し、家族と延命治療の関係についての三つの提言で締めくくったものである。延命治療の現状を海外の取り組みまで調べてまとめた点は評価できるが、前半部と最後の提言の間に少しギャップを感じた。提言の実現可能性等について、より立ち入った分析が欲しかった。

また、宮下凜さんは、専門家育成のためには文理の区別が必要だが、市民としての役割を果たすためには、文理の垣根を超えた幅広い視野を持つべきであると主張している。この点には全面的に賛成するが、論文がこの結論に向けて論理を積み上げていくような構成になっていないと感じた。たとえば、第二章の位置づけをより明確にしてもらいたい。

最後に将来の応募者へのアドバイスをいくつか書いておく。厚みのある小論文を作成するのに必要なことは、日頃から様々な分野に関心をもち、新聞、書籍、ネットなどから幅広く情報を収集する態度である。問題意識をもって情報に接すれば、それだけ得るものも多い。また、読む人の立場に立って論文の構成を決めることも大事である。最後は推敲を何度も重ね、論文の完成度を高めよう。

小泉信三賞選評

『文章読本』のすゝめ

早川浩（はやかわ ひろし）
（株式会社早川書房代表取締役社長・慶應義塾理事・評議員）

論文と散文は違うものだが、文字を使って相手を説得し、楽しませるという点では趣旨は共通している。応募作のなかには読む者の存在を忘れ、いささか独りよがりのものも見受けられた。ではどうやって読者を惹きつける文章を書くか。高校生諸君にはぜひ、谷崎潤一郎や三島由紀夫、丸谷才一が著わした『文章読本』の一読を薦めたい（全て中公文庫刊）。

なかでも私の推薦本は、小説、評論、翻訳、随筆など幅広い分野で活躍した丸谷の著作である。氏は文章上達の秘訣は「名文を読むことだ」と断言する。漢文や『源氏物語』、夏目漱石や森鷗外などの和書漢籍から先人の語彙、言いまわし、修辞技法を蒐集して、自らの文章を織るための糸とすべしと説いている。頭の中の引出しがたっぷりと余裕のある若者には、是非とも励行して欲しい金言である。

さて、小泉信三賞を受賞した稲垣さんの「『文学は社会の役に立つか』と問う社会を問う」は、まずなによりも課題自体を鵜呑みにせず疑問を呈する姿勢に感心した。何事も当然のこととせず批判的精神を持つことは社会に出ても大事なことだ。文学の価値を人間の歴史や自分の経験を交えながら整然と論じている点に好感が持てるし、文学の価値を肯定するという強い意思が行間から伝わってくる。ただ、相対する「科学」に関する考察の掘り下げ方が充分でなく、まとめが抽象論に終わっているのが惜しいが、才能を発揮できる土壌を持っていると見た。

次席の鷲山さんの「『家族』を拓く」は、映画『東京物語』『男はつらいよ』『万引き家族』に見る家族の形から、「未来の家族」の在り方へと思考を進める。論の運びが滑らかで楽しく読めた。若い人には文学にかぎらず、溝口健二、五所平之助、小津安二郎、黒澤明が撮った往年の名画もぜひ観てほしい。映画は一国の文化であるから。

佳作入選の佐藤さんの「家族と延命治療について」は、重い題材と真正面から取り組んだ作品だ。ただし、亡くなった祖父の話から延命治療への持って行き方が強引で主題が「家族」からいつの間にか「延命治療」にすり替わってしまっているのでそこを工夫すれば感動を呼べたのに。

早坂さんの「平成最後の高校生にとって『学問のすゝめ』は有用か」は、高校一年生にして同書を読みこなして、現代における有効性を考察したその意気や良しだ。丹念に調べた様子も見られ、真面目な書き方もよろしい。尻すぼみになってしまった結論を充実させればよりすっきりした論文になった。

宮下さんの「現代日本における『市民』のあり方」は、文系より理系の方が「頭が良い」という価値観を生んだ現代日本社会を考察する切り口が面白い。理系学科は全科目が密接に結びついており、いったん苦手になると遅れを取り戻すのに時間がかかるとの分析にも説得力があった。

そうそう、丸谷才一の『文章読本』にこんなことが書いてある。古典や漢文など文章・詩を読み込んでいないと難しい高等な技であるが、論文を書くうえでも大切な姿勢なので紹介する。

「文章はちょっと気取って書け」。